第１部　国際島嶼教育研究センターを中心とした活動

1-1.　はじめに

今回のプロジェクトの申請書を書いていた 2019 年には、奄美群島が 2018 年に世界自然遺産に登録されると期待されていたが延期になった奄美群島の世界自然遺産登録も 2020 年実現するだろう、そうなると海外からも注目され多くの外国人も訪問するであろうと想定していた。そこでタイトルに「グローカル」の文字があるように、奄美群島の国際化を推進することを本プロジェクトの主目的の一つに掲げた。ところがどなたもご存知のように、新型コロナウィルス感染症の世界的流行のために、2020 年に開催予定であった第 44 回世界遺産委員会そのものが中止となったために 2021 年まで登録は再延期、海外との人的交流はほぼ停止という状況になってしまった。何事も計画通りには進まないことがあると思い知らされた 2 年間でもあった。

コロナの流行により「グローバル」な活動は停止になったが、「ローカル」な活動は、感染者が多く島への渡航が差し止めになる期間はあっても比較的平穏な時には進めることができた。その成果をまとめたものが本報告書となる。

教育普及活動について述べると、大学で授業を遠隔で行わざるを得なくなったように、従来実施していた対面での講演会や観察会は、コロナの流行の度合いによって実施できたり中止となったりした。以前から好評であった島めぐり講演会を今回も実施したが、何回かは Zoom を使った遠隔講演会となった。ただコロナのためにやむを得ず遠隔講演会となったが、やってみるとその地域にいない人にも講演を聞いてもらえる利点に気づかされた。以前から遠隔で講演を行うシステムは存在したが、コロナ禍がなければ多くの人が遠隔の講演会を行ったり参加したりすることはなかっただろう。コロナが収まっても講演会等を遠隔でも聞けるようにすることが標準的になると思われ、それはコロナ禍があったおかげといえるだろう。対面式の講演会等の実施が難しいことと、最近では YouTube などで画像を見られるようにすることが一般的になってきたこともあり、このプロジェクトでも本文中に詳しく説明するように YouTube で情報発信をすることを試みた。

研究面では、世界自然遺産に登録された地域のモニタリングをどのように進めるかが、登録地域の大きな課題になっており、その一翼を鹿児島大学が担うために森林のモニタリングを開始することができたことが大きな成果だろう。多様な生物を研究するためにはそれぞれ違った方法で研究を進める必要があり、多くのそれぞれの専門家に参加してもらいそれぞれが専門とする分野の研究を進めていただいた。2 年間という短いプロジェクト期間であったが、本報告書の 38 編の研究報告、224 編の著作･論文となっている。多くの新種･新分布地の発見、生態の解明、生物と住民が共存するための努力などが綴られている。しかし、奄美群島には未解決な問題がいまだに数多くあり、さらなる研究の発展を期待したい。